

当報告の内容は、それぞれの著者の著作物です。

Copyrighted materials of the authors.

タイトル：「国際ワークショップ「西夏・契丹文文献の図録化と課題」 International Workshop: Xixia and Qidan Documents - Cataloguing and Task -」（公開研究会，兼「契丹語・契丹文字研究の新展開」平成23年度第3回研究会）

日時：平成24年3月23日（金曜日）午前9:30時より午後18時

場所：東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所 三階マルチメディア会議室（304）

報告者名（所属）：

1) TAKEUCH Yasunori（武内康則，AA研共同研究員・日本学術振興会・大谷大学）

A General Survey of Kitan Script Materials of Recent Years

This presentation discusses materials in the Kitan script that were recently found. In recent years, the number of materials discovered in the Kitan script has increased rapidly. There are two factors that have spurred the discovery of these new materials. One is that some research groups have provided funds to collect Kitan epitaphs that were scattered in the northern part of China, mainly in Inner Mongolia. Another factor is the increase in the number of private museums in China that collect historical materials, including Kitan epitaphs. This presentation concludes with a description of two Kitan materials that have been recently publicized—the inscriptions found in Mongolia in 2010 and the manuscript publicized in Russia last year.

2) WU Yingzhe（呉英喆，AA研外国人研究員・内蒙古大学蒙古学学院）

Organization of the Khitan Materials Kept in Inner Mongolia

About 40 inscriptions in the Khitan small script and 15 inscriptions in the Khitan large script have been discovered in China and Mongolia so far. More than half of the material (29 epitaphs) is kept in Inner Mongolia Autonomous Region (IMAR) at present. This talk sum up the Khitan materials kept in IMAR including authentication, date of creation, identification and relationship to the tomb owners. The author also put forward the places where the Khitan materials are held in IMAR.

3) WU Yulin（武宇林，北方民族大学）

Cataloguing Tangut Documents preserved in Japan

WU Yulin and ARAKAWA Shintaro published *XIXIA Documents Collected in Japan* (Beijing: Zhonghua Book Company, 2011) after over 5 years' preliminaries.

1) WU started the project 'publication of the Xixia documents in Japan' and consulted

with ARAKAWA in May, 2005. 2) ARAKAWA started the pre-research of the documents from Aug. 2005 to the end of 2007. 3) WU got the special fund for the publication from the official of China in Jun. 2007. 4) The sub-president and scholars of the North Ethnic University and WU stayed in Japan 14-20 Dec. 2008. They and ARAKAWA visited all institutions which preserve the Xixia documents. 5) The first version of the catalogue was edited and added the prefaces till Dec. 2009. 6) And the complete version was published in Dec. 2010.

The volumes received the second prize of “The 11th Quality Award for Social Sciences in Ningxia” (23 November 2011).

4) Kirill SOLONIN (キリル・ソローニン, 仏光大学)

Mahāmudrā texts in Tangut Buddhism.

The present study concerns itself with a few texts from P. K. Kozlov’s Tangut Collection. Specifically we are dealing with Tang 345 #2526, #2851, Tang 346 #7216 and #892. These texts are generally devoted to the Tibetan practice of Mahāmudrā, as it is found in both Kagyu and Sakya lineages of Tibetan Buddhism which were in the Tangut State during the later period of Tangut history. We have specifically researched the Mahāmudrā lineage preserved in Tang 345 and identified the personalities mentioned in the line of transmission. We have also several aspects of Buddhist terminology as it occurs in the lineage section of the text and suggested that the text, which had been definitely compiled in Xixia uses a kind of mixed Sino-Tibetan Buddhist technical vocabulary, probably representative of heterogeneous nature of the Tangut Buddhism in general. In the course of our research we suggested that Nepalese master Asu (Balpo skyed med) was probably known also under the name Vagīśvara might have been one of the major perpetuators of Tibetan Buddhism in the Tangut State. The research is a work in progress, so many of the conclusions and observations are tentative.

5) DU Jianlu (杜建録, 寧夏大学)

On the Cataloguing ‘Tangut Manuscripts Collected in China’

Main collections of the Tangut documents are kept in the libraries, museums, institutes and so on in Beijing, Ningxia, Gansu, Inner Mongolia, Shanxi and Taipei. Above all, the National Library of China has the largest numbers of the materials in China. It is the second institution all over the world, which preserves the documents written in Tangut. From 2001 to 2007, over 20 institutions including the academic centre of Tangut studies (Ningxia University), the research centre for ancient documents in Gansu, and the National Library of China have published the whole catalogues of the Tangut

documents (over 10,000) in China. The presenter introduces the organization and compilation of the titles and proposes the future tasks (historical criterion, clarification of contents, and foundation of the database of the materials).

6) Kirill. BOGDANOV (キリル・ボグダノフ, 東洋文献研究所)

The cataloguing of IOM RAS Tangut materials' collection: the current research situation, problems and research prospective

This talk sum up all the results of cataloguing and inventory work with the Tangut materials of P. Kozlov collection that later became Tangut fund of manuscripts and xylographs of Asiatic Museum, now - Institute of Oriental Manuscripts of RAS. The history of library cataloguing work, the current work situation and the problems of this work, and catalogue work methods and the possible prospective of work are described in this speech. Also some data concerning the Tangut books history that have been received during this work were put in this lecture.

7) ARAKAWA Shintaro (荒川慎太郎, AA研所員)

Catalogue of Tangut Documents and Study on Tangut Language

We (WU Yulin and ARAKAWA Shintaro) published *XIXIA Documents Collected in Japan* (Beijing: Zhonghua Book Company, 2011). The presenter introduces the special collections of Tangut documents in Japan (the location and main contents). Second, the studies on Xixia and the Tangut language in Japan are introduced (specially, Prof. Tatsuo Nishida's studies on the Xixia documents in Tenri Central Library and Ryukoku University, and Prof. Hiroshi Matsuzawa's identification and historical studies of a lot of fragments in Japan). We discuss the studies on the Tangut language based on the sources in Japan –vocabulary, lexicology and morphology. Finally, the perspective for the future studies is proposed.

タイトル:「第12回遼金西夏史研究会大会」(公開研究会, 兼「契丹語・契丹文字研究の新展開」平成23年度第3回研究会)

日時:平成24年3月24日(土曜日)午後13時より午後18時,平成24年3月25日(日曜日)午前9:30時より午後15:30時

場所:学習院大学(目白キャンパス)中央研究棟402教室

2012年3月24日(土曜)

1) 中田美絵氏(甲南大学)

「8世紀後半におけるユーラシア情勢と長安仏教界」

8世紀半ばの安史の乱をはじめとする政治的危機を契機に、唐の都長安では護国を目的とした經典翻訳など一連の仏教事業が朝廷主導のもとになされ、8世紀末にはその最後を締めくくるような形で一切経目録が完成する。この8世紀後半の長安は、中国史上のみならずユーラシア史上における国家仏教がもっとも隆盛をみた歴史空間のひとつととらえることができる。本報告では、以上のような8世紀後半の長安仏教の隆盛が具体的にはどういった人々の活動によって可能になったのかを分析する。その際、①唐の中央政界の変動、②唐を取り巻くユーラシア情勢、がかれらとどのように関係していたかに着目する。また、こうした人々により推進された活動の総体である長安仏教がその後のユーラシア東部地域にいかなる影響力をもたらしたかを展望する。

※ミニシンポジウム「遼・金・西夏研究の現状と展望」

報告者：飯山知保氏（早稲田大学）、佐藤貴保氏（新潟大学）、高井康典行氏（早稲田大学）、司会：渡辺健哉氏（東北大学）〈要旨は割愛〉

2012年3月25日（日曜）

2) 毛利英介氏（京都大学）

「宋は兄で遼は弟か——遼宋擬制親族関係について——」

西暦一〇〇四年に遼（契丹）・宋（北宋）間で史上有名な澶淵の盟が結ばれた。これに伴い、遼と宋が兄弟関係になったこともしばしば語られる。

正確に言うならば、兄弟関係となったのは当時の宋真宗と遼聖宗であり、これはあくまで両者の年齢に基づいてのことであった。そして、以後の遼宋両国皇帝間の擬制親族関係は宋真宗と遼聖宗の兄弟関係を起点として設定されることから、両国の当代の皇帝間の関係は兄弟である時もあるればそうでない時、例えば叔姪・伯姪等の場合もあった。つまり、両国の当代の皇帝間の関係は可変的であり、且つ遼帝が輩行の尊卑において優位に立つ時代も短くはなかった。このような経緯はしばしば誤解をされているが、実のところは七十年前に高名な聶崇岐「宋遼交聘考」により明らかにされていることであり、学問レベルではすでに定まった見解となっている。

ただし、聶崇岐以下の先行研究においては、遼宋両国の皇帝の擬制親族関係が同輩行であった際は、偶然も作用して常に宋が兄・遼が弟であったと考えられてきた。具体的には、宋真宗と遼聖宗、宋仁宗と遼興宗、宋英宗と遼道宗、宋徽宗と遼天祚帝の関係である。しかし、発表者は、宋徽宗と遼天祚帝との関係は通説に反して天祚帝が兄・徽宗が弟であったのではないかと考える。

上記の問題意識のもと、本発表では、まず遼宋両国皇帝間の擬制親族関係について概観した後、遼天祚帝と宋徽宗の関係について考えたい。その際、北宋の「政治日記」として有名な『曾公遺録』を利用したいと考えている。遼天祚帝と宋徽宗の両者の関係の検討は、

史料的な問題から手薄な遼宋関係の最終幕解明の一助となるだけでなく、宋徽宗朝政治史の把握においても基礎的な情報を提供するものであると考える。

3) 吉野正史氏（早稲田大学）

「「耶律・蕭」と「移剌・石抹」の間——『金史』本紀における契丹・奚人の姓氏記述に関する考察——」

『金史』本紀においては、世宗の大定元年及び二年を境として、海陵王の正隆年間以前には耶律・蕭により記述されていた契丹・奚人の姓氏が、移剌・石抹によるものへと明確に切り替わる。本報告では、(1)主に熙宗朝から金朝滅亡後までの文献・石刻史料及び南宋・高麗側史料において契丹・奚人の姓氏がどのように記述されているかを網羅的に把握することで、『金史』の記載と実際の状況とのずれを明らかにし、(2)何故そのような事態が発生したのか、当時の政治的コンテクストから解釈を行う。

まず金朝側の文献・石刻史料を見ると、章宗の明昌年間以前のものについては全て耶律・蕭を用いているが、直後の承安・泰和年間のものには移剌・石抹へと変化しており、それ以後のものも同じ傾向を示している。続いて、南宋・高麗側の史料を見ると、同じく明昌年間までは耶律・蕭が使用され、承安年間については確認できないものの、泰和年間以後は移剌が用いられていることから、金朝側史料の状況と軌を一にしている。これによって、耶律・蕭から移剌・石抹への変化は、実際には『金史』本紀の記す大定初年ではなく、明昌から承安年間の間には発生したことがわかる。そしてその変化が極めて急激であることから、それは自然発生的なものではなく、何らかの政治作用の下に起きたのだと考えられる。

『金史』本紀の史料となった金代歴朝実録のうち、『海陵王実録』は世宗朝期に、『世宗実録』は章宗朝明昌末年に編纂された。諸史料の示す契丹・奚人の姓氏記述の転換時期と、『金史』世宗本紀が伝える状況、そして『世宗実録』の編纂時期を総合すれば、明昌末年ごろの政治状況が実録に反映された結果、本紀においては姓氏記述の転換が大定初年であったかのような記載がなされることになったのだとの仮説が成り立つ。

内には猛安謀克間における経済格差の拡大と黄河氾濫による社会問題の深刻化を、外にはモンゴル高原からの遊牧諸部族の侵攻という問題を抱える中で即位した章宗は、同時に伯叔父達との確執、元妃派と反元妃派との対立という課題に直面していた。このような状況下にあつて、章宗は様々な改革に注力したが、『世宗実録』の編纂もまた世宗をより神聖化するとともに、章宗自身と世宗との一体性・連続性を示し、章宗政権の権威を維持するための有効な手段だったであろう。契丹・奚人の姓氏記述の変化とその実録への反映も、そのようなコンテクストの中から読み解くべきと考える。

『金史』編纂の中心は、世宗朝の史実を記すことにあつたと言われるが、「世宗本紀」には極めて重層的な政治的バイアスがかかっている。耶律・蕭から移剌・石抹へという契丹・奚人の姓氏記述の変化という一点からもそれが明らかとなる。

4) 大西啓司氏 (龍谷大学)

「西夏に於けるシャーマンの活動——『天盛旧改新定禁令』を中心に——」

西夏(982~1227年)に関しては、遼朝や金朝とは異なり、正史が編纂されず、伝記、墓誌等の史料もほとんど存在しない。故に、1900年代初頭、ロシアのコズロフ探検隊により、カラホト遺跡(中国内モンゴル自治区エチナ旗)に於いて発見された西夏語文書は、西夏史を研究する上で高い価値を有している。そして、このカラホト出土西夏語文書を利用した諸研究により、近年、西夏史研究は大きな進展を見せている。中でも、西夏語によって記された法典『天盛旧改新定禁令』(以下、『天盛』とする)を利用した、西夏の経済、官制、軍事制度に関する研究が、これまで数多く発表されている。

『天盛』は、西夏の年号である「天盛」を題名に冠していることから、西夏の天盛年間(1149~1169年)に制定された法典であると考えられている。この時期は、西夏皇帝仁宗(李仁孝、在位1139~1194年)の在位年代にあたり、西夏に於いて仏教や儒教が非常に繁栄した時代であった。一方で、その時代に成立した『天盛』の条文中には、シャーマンについての記載も見られる。かつて、岡崎精郎は、漢籍史料中に見える西夏のシャーマンに関する記載を紹介している(「西夏の民族信仰について」『古代学』5-1、1956年)。『天盛』の記載は、西夏語文献の側からシャーマンに関する漢籍史料の情報を補うものとして重要なものである。本発表で扱うシャーマンに関する『天盛』の条文は、島田正郎(「西夏法典初探(9)官牧」『法律論叢』73-1、2000年)、楊積堂(『法典的西夏文化—西夏《天盛改旧新定律令研究》—』法律出版社、2004年)の研究中に引用されているが、そこでは条文の内容についての十分な分析は為されていない。

岡崎(前掲論文)が、遼と同様に、西夏の民衆生活を直接規範したものは、恐らくは法ではなく、シャーマニズムの呪術力であったと考えられ、西夏社会史を究明する上で、そのシャーマニズムの究明が前提条件であると述べているように、西夏の社会文化を考えていく上で、西夏社会に存在したシャーマニズム的要素は無視することが出来ず、シャーマンの活動について見ていくことは重要な意味があろう。

これまでの先行研究では、『天盛』の条文を引用する際に、史金波、聶鴻音、白濱(『中国珍稀法律典籍集成 甲編第五冊 西夏天盛律令』科学出版社 1994年、『天盛改旧新定律令』法律出版社、2000年)の中国語訳、あるいは、Кычанов, Е.И. (*Измененный и заново утвержденный кодекс девиза царствования негесное процветание (1149~1169)*). 4том. Москва, 1987~89年)のロシア語訳に全面的に依拠している。

既に、佐藤貴保(「西夏法典貿易関連条文訳註」『シルクロードと世界史』大阪大学大学院文学研究科、2003年)が指摘しているように、これらの訳書は、西夏語原典の西夏文字をどのように解釈したかという根拠となる録文を提示しておらず、また解釈も不十分であるという問題点が存在する。また、『天盛』で使用されている西夏語は難解であり、『天盛』の条文を利用するには、西夏語原典の録文を提示、かつ解釈も十分に行うことが必要不可欠である。

そこで本発表では、シャーマンの活動についての記載が見られる、『天盛』巻7「殺す死ぬ賭ける門」第453条、巻19「家畜が病気になる門」第1362条を西夏語原典より直接読解し直し、『天盛』の中では、シャーマンの活動について、どのように規定されているのかを明らかにし、西夏社会に於けるシャーマニズム的世界の一端を窺ってみたい。

5) 荒川慎太郎氏 (AA研所員)

「ロシア東洋文献研究所所蔵西夏語文献 Tang. 46, inv. No. 156 再考」

ロシア科学アカデミー東方文献研究所には「Tang. 46 inv. No. 156 (2006) st. inv. No. 5217」と整理される、興味深い西夏文字写本が存在する。手書きの図に、西夏数字や部品名と思しき文字が書き込まれた資料である。クチャーノフ・ゴルヴァチェーヴァ (1963) の紹介で「名称なし。楽器の構造図」とされて以降、その説が踏襲されてきた。本発表では、図像の解釈と西夏文字の判読に基づき、新たな解釈を提案した。まず、西夏数字と寸法を判読すると、最長の部品が3メートルほどになり実用の楽器とは考え難い。次に図像の、「弦楽器のネック」と考えられてきた部分は、「ペグ」の位置が直線となり不自然である。一方、中央と左側の図を、対象物の正面と側面と仮定し、判読した寸法を縮尺した模型を作成すると、宋代の「砲」(投石器)の基部のようになり、『武経総要』などに形状に近い図が確認できる。なお、『武経総要』に挙がる砲の部品名称と、当該図の、部品を表す西夏語の訳も対応が確認できる。現段階ではこの兵器の名称は「○○砲」としか分らないが、今後西夏の軍制、黒水城の防衛の実際、などを研究する上で重要な資料となるに違いない。本発表の論文版は、

Arakawa, Shintaro (forthcoming) "On the Draft of a Tangut "Stone Launcher" -Tang. 46 inv. No. 156 (2006) st. inv. No. 5217 preserved in Oriental Manuscripts Institute, Russian Academy of Sciences-" *Письменные памятники Востока*. Вып. 1 (16), 2012. に掲載される。